

過疎地域における AI デマンド交通の利用実態に関する分析 ー長野県佐久市望月地区の事例からー

令和 6 年 2 月 山口 さくら

要旨

目的

過疎地域では人口減少・少子高齢化が急速に進行し、輸送人員の減少や交通事業者の不採算路線からの撤退など地域公共交通をめぐる環境は厳しくなっている。そんな中、効率的な配車を実現する AI デマンド交通が注目されているが、対象地域が置かれた環境は全く異なり、実践事例は限られている。そこで、本研究では、知見の蓄積を目的とし、過疎地域である望月地区（旧望月町）を対象に利用実態を分析する。

方法

「さくっと」実証運行の望月地区の登録者情報、利用者実績、アンケート調査結果をもとに、アンケートの集計、「さくっと」の利用について、説明変数に個人属性を用いてロジスティック回帰分析によるモデルを構築した。また、利用者実績を 1 日ずつ利用者ごとに整理し、利用パターンを把握するための探索的な分析を行った。

結論

ロジスティック回帰分析の結果から、望月地区における「さくっと」の利用について、「一人暮らしであること」と「運転免許を持っていないこと」が影響していることが分かった。また、利用者実績から、利用パターンは、片道と往復の 2 つがあるが、往復については、さらに「往路と復路の停留所が同じ」と、「往路と復路で停留所が異なる」の 2 パターンがあると考えられる。後者について、全ての組合せを書き出した結果、その半数以上において、スーパーに設置された停留所が復路の出発地に指定されており、かつ、その利用者のほとんどが往路と復路の便を同時に予約していることから、時間調整と買い物を兼ねた計画的・効率的な予約・利用をしていると考えられる。

指導教員 高瀬 達夫 准教授